

などLEDライトに交換したところは以前よりも明るくなっているので変化がすぐにわかると思います。この建物には私が引退するまで(あと30年位?)は崩れないようにがんばってもらいたいと思います。

黒石病院研修医 工藤葵 先生

黒石病院の研修医2年目の工藤葵です。この度、8月1日から8月31日まで沢田内科医院で研修させていただきました。非常に有意義であり、おそらく普段とは全く異なるであろう診療を経験させていただけた研修となりました。

朝病棟回診から始まって、午前の外来は14時前後までかかり、午後は19時頃まで行っていました。外来の間に内視鏡検査もします。即ち非常に多忙です。先生方やスタッフの方々是非常にご多忙であったと思いますが、研修させていただいていた身としては、多くの患者さんを診ることができ、多くの症例を学ぶことができたため、忙しいに越したことはありませんでした。患者さんから得られる限られた情報から、診療科を問わずに多くの鑑別疾患を挙げる必要がありました。つい内科疾患ばかり考えがちだったので、視野を広げる練習になりました。

沢田内科医院のような開業医の役割について、先生方が様々なことをお話ししてくださいました。その中で感銘を受けたものがあります。毎日何人か、検診で胃カメラや大腸カメラを受けに来る患者さんがいらっしゃいます。そういった患者さんに毎年受けてもらうことが大事で、それが開業医の役割であるとおっしゃっていました。だからカメラは出来る

限り痛くしないようにしているそうです。実際、毎年受けている患者さんはあまり苦しそうにはしていませんでした。

地域での役割を担うために自分の技術を磨いているということです。私も、日々の勉強が地域の利益になっていくと信じて、それをモチベーションに今後も鍛錬を積みたと思いました。

実は、8月はまさに弘前市内に新型コロナウイルス感染症が蔓延していた時期でした。沢田内科医院ではその影響をダイレクトに受け、発熱外来に患者さんが殺到していたため、通常診療を制限する事態でした。そのような中で研修を受け入れていただき感謝しかありません。難しいのは、発熱している人の中にコロナが原因ではない患者さんが少なからず混ざっていることでした。短い診察時間で、今後精査を積極的にすべきか判断しなければなりません。症状や背景から、重症化が懸念される患者さんを見極めていました。私は感染症外来で直接診察を行ってはいませんが、自分だったらどのように対応するか考えながら、検体を採取するお手伝いをさせていただきました。本来の通常診療が制限されてしまっていたのは非常に残念でしたが、代わりに貴重な経験をさせていただくことができました。

1ヶ月間、ご多忙の中ご指導していただいた澤田直也先生、澤田美彦先生、非常に親切にいただいた看護師の方々、技師さん、事務の方々、本当にありがとうございました。毎日ご多忙であったと思いますが、皆さんの明るい雰囲気の中でリラックスした気持ちで研修できました。ピロリ菌の検査をしてもらって陽性だったことですし、将来痛くない胃カメラをしてもらいに通いたいと思います。本当にお世話になりました。



弘前総合医療センター研修医 松橋周一 先生

9月の1ヶ月間、沢田内科医院でお世話になりました、松橋周一です。今年度より合併し、国立弘前病院あらため弘前総合医療センターの2年目研修医です。総合病院では経験できないことはもちろん、なんでもやるがモットーの澤田先生達のもとだから学べたこともあり、充実した毎日を過ごさせていただきました。これからも沢田内科での学びを活かし、励んでいきます。

さて「自由に書いて良いよ」と言われたので、ここからは本当に自由に書くことにします。私が自己紹介をする際に、よくする話です。

私はキュウリを食べません。それはアレルギーでもなければ、好き嫌いでもありません。大昔に、河童と約束したからです。

昔、八戸の新井田川(八戸市民

病院の横を流れる川です)では溺れる人や家畜が沢山いて、村の人達は大変困っていました。それはどうもそこに住む河童の仕業のようで、当時の村の顔役だった私の先祖は、その理由を直接尋ねに行きました。すると河童は「自分達の好物のキュウリが、人間に全て食べられてしまうからだ」と答えました。そのため先祖は「では私の家はこれからキュウリを食べないことにする。その代わりに、もうこういうことはしないでくれよ」と約束しました。こうして私の家は、代々キュウリを食べないことを今も続けています。家の食事でキュウリが出たことはありませんし、外食で注文する時は抜いてもらいます



し、(申し訳ないとは思いつつも)入っていたときは残っています。私の数少ない自慢は、好き嫌いがないことなのですが、そういう理由で、キュウリだけは食べません。沢田内科の昼食でも、キュウリが出る日は毎食抜いてもらっていました。

さて、河童の話といえば、民俗学者の柳田國男がまとめ上げた”遠野物語”が挙がるのではないのでしょうか。遠野には河童に限らず様々な伝承が残っていて、大変有名で羨ましい限りです。では遠野だけが特別お伽噺に富んでいたのでしょうか？ 私はそうは思いません。柳田國男がまとめ上げたからこ

そ、今尚残っているのだと思います。河童との約束のような些細な話が、昔はそこかしこに溢れ、長い間語り継がれていたことが山ほどあったはずですが、けれどその殆どが、残されること

なく、絶えてしまいました。途絶えてしまったであろう伝承の多さを考えると、本当に、本当にもったいないと感じます。現代は今まさに伝承が途絶えていっている時代だと思います。もし地域のお話をご存知なら、何かしらの形で残してみませんか。私はこのような文章を書く機会が頂けて、とても幸せです。

全く医療に関係ない話をつらつらと続けさせていただきました。なんかキュウリ食べないって変なヤツがいたな、と頭の片隅にでも残ったのなら幸いです。

西目屋小の子どもたちがジュンク堂へ (澤田美彦)

陸奥新報に西目屋小学校の5年生と6年生の子どもたちがジュンク堂へ行って本を選んでいる記事が掲載されました。低学年は平積みされている本が多いということで、日を改めてヒロコのツタヤへ行くこ

とになっています。

私の故郷、西目屋村の子どもたちに本を読むチャンスを与え、その中で自分の将来を考えてもらおうと

読書活動を行っています。とはいうものの、ふるさと納税の制度を使って資金援助をするだけですが。この活動に対して西目屋小学校は平成30年に文部科学大臣賞をいただきました。また、それまで進学したことがない大学に西目屋村の子どもたちが進学しています。これも多分、読書活動の成果のひとつだと勝手に解釈しています。

私は読書活動を始める時に学校の先生方に3つのことをお願いしました。まず、読書感想文を書かせないこと。本を手にとってみるのが目的です。その中で興味があることを読んで

てもらいたいので強制してはかえって本が嫌いになってしまいます。2つ目は先生方へのお願いです。よく学校では読書の時間を設けています。この時に、先生方は自分の仕事をしないで子どもたちと一緒に本を読んで欲しいということです。3つ目は、本を図書室において番号をつけて管理しないで欲しいということです。とにかく面倒な手続きをしないで、子どもたちに自由に本を手にとってもらいたいからです。

さすがに、学校としては3つ目のことは受け入れられないとのことでした。でも、学校に行ってみると、本は図書室だけでなく教室にも廊下にもイベントホールにも置いてありますので、私の気持ちが通じたのだと思っています。

3歳、4歳の孫の行動を見てると面白いことが分かります。私から見ると全く面白くない場面なのですが、子どもたちはそのテレビの画面にくぎ付けにされていることがあります。この番組を作った人は、子どもがどんなことに興味を示すのかがよく分かっているのです。このような番組を作ることができるでしょう。

西目屋小学校では図書を充実させるためにたくさんの新しい本を買いました。当然のことですが、これらの本は大人が選

んで子どもたちに与えています。学校の先生ですから子どもたちのことはよく知っていて、それを前提に子どもたちのためになる本を選んでいくことは間違いありません。

でも、孫たちの行動を見てると、先生たちが選んだ本がある図書室ではなく、本屋で子どもたちに実際に本を見て選ばせるとどんな本を選ぶのだろうかと思うようになりました。そこで、西目屋村教育委員会に対して、子どもたちの目から見て欲しい本を選ぶことを提案しました。具体的には、子どもたちを弘前の本屋に連れて来て、売っている本棚の本を手にとってみて欲しいと思った本を買ってもらおうということです。これには庭田校長先生も賛成してくれ実現することになりました。これが陸奥新報の記事になった次第です。

西目屋小学校の子どもたちはバスでジュンク堂へ行ったようです。どのような本を子どもたちが選んで買ったのか、まだ実際には見ていません。これが繰り返されると子どもたちが作った子どもたちの図書室が出来上がるのではないかと考えています。楽しみです。

陸 奥 新 報 9/25 2022

西目屋小学校医澤田さんの寄付金活用

西目屋村の西目屋小学校（庭田瑞穂校長）の5、6年生21人が21日、ジュンク堂書店弘前中三店を訪れ、読みたい本を自由に購入した。同村出身で同校学校医の澤田美彦さんが児童のために

に使ってほしいと贈った寄付金を活用した初めての試み。児童は事前にリストアップしてきた本を探したり、タイトルや表紙から直感で選んだり気に入った本を手にとった。（石田紅子）



本棚を見詰め読みたい本を探る児童

好きな本自由に購入

5、6年生「なんだか楽しい」

澤田さんはこれまで、村びに教師らが本を選び書店の児童生徒のために年10〇〇〇円に注文していたが、今回は0万円の寄付を10年以上続 澤田さんの提案もあって、0万円の寄付を10年以上続 澤田さんの提案もあって、0万円の寄付を10年以上続 澤田さんの提案もあって、0万円の寄付を10年以上続

入する取り組みにした。予算は1人7500円で5冊まで購入できる。児童はリストアップしてきた本を探索機で探し、本棚を眺めて気に入った本を手にとったり思い思いに選書した。5年生の駒井陽向さんは「欲しい本の目星を付けてきたけれど見つからない」としながら「恋愛系の児童小説にはまっている。こうしてみ